

播州織の歴史と今を見つめて

西脇市を代表する地場産業「播州織」。私たちのまちは、播州織の繁栄と共に発展してきました。200年以上の歴史を誇る播州織の魅力をさらに高めようと奮闘する若者たちを追いました。

播 州織は、江戸時代中期に京都から織物の技術が伝わったのが起源とされ、先に染めた糸で柄を織る先染織物独特の自然な風合いで、広く愛されてきました。明治時代後期から、その名を広く全国に知られるようになった播州織は、第二次世界大戦後、販路をアジアからアメリカなどにさらに拡大。織機が「ガチャツ」と音を立てると1万円もうかると言われた空前の好況期「ガチャマン景気」を迎えました。しかし、昭和60年以降は、急激な円高の進行で輸出中心の産地は大きな打撃を受けました。それからは再び国内に目を向け、「多品種・小ロット・短納期」に対応することで多様なニーズに応えられる産地として再生を図っています。低価格な衣料を短いサイクルで大量生産・販売する「ファーストファッション」全盛の現代にあつて、播州織業界は、先染織物ならではの自然な風合いや、他の産地ではまねのできない高付加価値商品の開発などで、ブランド力の

向上を目指して力強い歩みを始めています。一方で「播州織の素晴らしさをもっと知り、その魅力をアピールしたい」という若者たちも増えていきます。* * * **西** 脇高校は今年度、文部科学省から「スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール」に指定されました。情報化や国際化の急速な進展を受けて、現在の産業界は、これまでの枠組みを超えて活躍できるプロフェッショナルな人材を多く必要としています。西脇高校は、そのために全国でわずか10校指定されたうちの1校で、平成28年度までの取り組みを行います。西脇高校は、これまで数多くファッションショー等のイベントを開催し、生徒たちが自ら衣料のデザイン・制作、モデルまでこなすショーは、高く評価されてきました。生活情報科120人を指導する藤原容子教諭は、今回の指定織の良さを見直すことにしま



西脇高校生活情報科では、「Cool Japan Cool Bansyuori-播州織再発見と西脇産ブランド発信-」をテーマに、若い感性でものづくりに挑戦中。特定の購買層を設定して具体的な商品提案を行うなど、その内容は高校生としてはかなり実践的なもの。これまでに磨いた提案力を生かして、地域活性化への貢献も期待されている。

生 徒たちは、播州織の歴史や伝統を学びながら、市内の産元商社で研修し、技術の高さや生地の種類などをあらためて知りました。また、最先端のコンピュータ技術で、自分のイメージを織物デザインとして表現できるようになりました。さらに、神戸や東京で数日間わたる展示販売等を経験するなど、さ

昨 年10月下旬、生活情報科の2年生たちは、日本の「美」を知るために京都を訪れました。紅葉や竹林等の美しい風景や和の精神、伝統を尊重して日々の暮らしに取り入れている人々の姿がそこにありました。伝統美を見つめ直す機会を得た生徒たちは「産地に暮らす私たちならではの、播州織の新しい魅力」を提案したい」と意気込んでいます。

した。目標とする「独自ブランドの立ち上げ」のため、基本に立ち返る必要があると考えたからです。**播州織を学び自身を磨く**

さまざまな角度から播州織に関わってきました。**産地の高校生らしい提案を**

西脇高校が文部科学省からスーパー・プロフェッショナル・ハイスクールに指定

特集

伝統に新風を

若者たちの播州織



高校生ものづくりフェア
西脇高生が、服のデザイン・制作からモデルまで務め、播州織の魅力をPR。
(平成26年7月 大丸神戸店)



トップデザイナーが語る、播州織の魅力。

AKIRA ISOYAMA

兵庫県と姉妹提携しているオーストラリアの若手デザイナーら3人が2月上旬、市内の播州織工場や産元商社を見学。アドバイザーに五十川明氏を迎え、海を越えたコラボレーションに取り組んでいる。播州織には若者だけでなく、トップデザイナーを引きつける魅力がある。



9月のパリ・コレで発表する播州織ドレス

経済産業省の補助事業で市内の産地再生プロジェクト「新播州企画」を訪れたのは、オーストラリアの新進気鋭のデザイナー3人と同国トップデザイナーの五十川明さん。自身もブランドを持つデザイナー、シエリー・ティンデルさんは「西脇は想像していたよりはるかにスケールの大きな産地。全工程で繊細な技術が組み合わさっており、間

違はなく世界レベル」と驚嘆。五十川さんは「綿の性質を生かした播州織はともユニーク。オーストラリアでは入手困難なほど高品質で、イメージが次々にわいてくる」と絶賛。「9月のパリ・コレでは、あえて伝統的な手法で織られた播州織のドレスを発表したい。日本が誇る素材を世界に披露できる日が楽しみです」と話しました。

いそがわ あきら 五十川 明さん

1999年からパリ・コレに出展するなど国際的評価の高い日本人ファッションデザイナー。オーストラリア在住。2007年、第1回オーストラリア・ファッション大賞受賞。現在、世界11カ国でコレクションを展開中。2012年、内閣府から「世界で活躍し『日本』を発信する日本人」の一人に選ばれた。

播州織と若者たちの関わりについて、繊維工業技術支援センター(野村町)の古谷稔所長に伺いました。
* * *
播州織業界も他の伝統産業と同様に、後継者の育成が大きな課題です。
しかし、播州織業界の場合には、少し事情が異なります。例えば、和装業界だと市場が国内に限られて規模が年々小さくなっていくことに加え、伝統的な技術やデザインに若者の感性を生かせる機会が少ないのが現状です。ところが、播州織業界の場合は洋装が前提なので、市場規模は和装ほど縮小していません。また、長年、ファッション産業と関わり、さまざまな要望に応じ

てきた実績から、企画部門を充実させている産元商社が多く、若者が企画段階から挑戦できる余地が大きいのが特徴です。
実は、毎年のように、京阪神や東京からファッションを学ぶ学生たちが西脇市を訪れて「染め」や「織り」などを学んでいます。彼らの中には卒業後にプロのデザイナーとして活躍する人もいます。最近、都会でファッションを学んでから産元商社で働く若者も増えており、斬新な商品の提案や独自ブランドの立ち上げなど、次々に「新しい風」を吹き込んでくれています。産地の活性化のために、私たちも彼らを支え、見守りたいものです。

若者たちの新鮮な感性に期待



ふるたに みのる 古谷 稔 所長

兵庫県立工業技術センター繊維工業技術支援センター所長。同センターは、これまで先進的な技術や製品の開発、生産技術の効率化などで産地に貢献してきた。



プロジェクト 西脇アイシテルproject

播州織を通してまちを盛り上げようと活動する女性グループ。若い女性の目線で、播州織の新たな魅力を追い求めている。彼女たちが手がけた服や小物は、特に子どもたちや女性に人気。



素材としての

「綿」に注目して播州織の魅力に迫ろうとしているのは「365COTTON」(サブロクコットン)の皆さん。綿花の栽培を通じて、服の成り立ちを知り、自然を大切にすることを「西脇アイシテルproject」の小野さんをはじめとする市内の方や京阪神のプロのデザイナーたちが立ち上げました。綿花の栽培は、子どもたちの環境教育などに取り組みむボランティアグループ「大地の銀ぬくもり コットンボール」

行」に指導を仰ぎ、昨年5月上比延町の畑100坪に多品種を植え付けました。綿花の収穫には、親子連れ等が京都からも参加。摘んで来たばかりのコットンボールでリースを作ったり、大阪のパートで綿繰り機を使った実演を行ったりして楽しんで活動を広げています。メンバーは「大地に種をまき、育て、収穫の喜びを子どもたちと共有できる意味は大きい」と話し「ものを大切にする暮らしの良さを見直すきっかけになれば」と目を細めました。

サブロクコットン 365COTTON

播州織の基本的な素材である綿。播州織の産地・西脇で1年を通じて綿花を栽培し、自然を大切にする心を育てる“服育”を提唱する。「服は畑でできている」がキャッチコピー。



市内の産元商社に勤める小野圭耶さんは、6年前、播州織とその産地である西脇市の魅力を知ってもらおうと、同じ思いを持つ西脇高校の卒業生たちと「西脇アイシテルproject」を立ち上げました。
全員が同年代というメンバーですが、そのほとんどが一度地元を離れて進学や就職を

経験しています。離れて客観的に故郷を見たとき、少し元気がない様子が気になり、播州織の魅力で地域を活性化したいと考えたそうです。
彼女たちは、地元に着着したファッションショーや、播州織の端切れや糸軸を活用した小物作りなど数々のワークショップを手がけ、みずみずしい感性で地域内外の方と広

く交流してきました。2月18日には、母校で播州織を通じてこれまでの活動成果を発表するなど、後輩にも大いに刺激を与える存在になっています。
今春で活動を一時休止することになりましたが、メンバーそれぞれがさらに力を付けて、近いうちに活動を再開しようと呼び合っています。